

鹿沼の自然・栃木の旅

月報第24号

(2014年5月)



北光クラブ

自然観察クラブ 鹿沼

新湯富士とヨシ沼・大沼ハイキング
～亜高山帯の新緑の樹木と湿原植物の観察～

五月の半ば頃から六月の初め頃までが、山の旅には一番いい時候であろう。七月、八月は暑すぎる。秋もいいが日が短い。日が永くて気候がよくて、青葉は洗ったように鮮やかで、峠や溪谷のつつじ、藤、山吹が真盛りに咲いて、時鳥やカッコウの声が絶えず聞え、時々、思い出したような雉子の頓狂な声が人を驚かす。斯うした旅が味わえるのは、晩春の頃だ。



晩春の旅から色彩の観念を除くことは出来ない。特別に登山をやる場合は別として、五月半ばから六月の初めにかけての山旅では、私は先ず爽やかな緑、その間をかがる色さまぎまの花を要求する。眺望のよいこと、自然の姿それ自身のよいこともさることながら、色彩に豊かな自然の間を旅することが晩春の旅に与えられた最もいい特典であろう。

田部重治著『山路の旅』（昭和13年10月10日・新潮社発行）より

登りゆく春を追って鶏頂山北麓にある大沼、ヨシ沼を訪ねてみましょう。鬼怒川温泉から三依に向かい、トンネルを抜けて塩原へ。奥塩原温泉・新湯に車を置いて歩き始めます。新湯富士は標高1,184mですが、奥塩原温泉からの標高差は300mほどです。2グループに分かれ、山好きの人は富士越え、体力に自信のない方はほとんど登り下りのない山麓道を進み、大沼の入口（駐車場・トイレあり）で合流して大沼を散策。湿原の植物等を観察してお昼を食べ、山麓道を、ヨシ沼を観察しながら奥塩原温泉に戻ります。

大沼の標高は900mほど。横根山、井戸湿原の1,270mより低いものの、古峰ヶ原では見られない、亜高山帯の植物が多く見られ、尾瀬を思わせる素晴らしい園地です。

日 時：5月18日（日）AM6:00北小西門集合（解散はPM5:00頃）
 行 程：鹿沼——大沢——鬼怒川温泉——三依——塩原——奥塩原温泉・新湯
 …(1:00)…新湯富士…(0:40)…大沼（周遊 0:40）…(0:50)…
 奥塩原温泉・新湯——塩原——三依——鹿沼

服 装：長袖シャツ、長ズボン、防寒着、帽子、軍手、軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、水筒（ポット）、雨具、お手ふき、ハンカチ、
 ちり紙、筆記用具、レジ袋、レジャーシート、おやつ、お弁当

必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、ステッキ、ヘッドランプ、
 参考書（栃木の山150、栃木百名山ガイドブック等）
 1/25,000 地形図は「塩原」

参加費：おとな 600 円、子ども 300 円

他に保険料（1年間）おとな 1,300 円、子ども 800 円

問合せ&申込み：阿部（携帯 090-1884-3774）

※ 次回は日光太郎山 6月8日(日)AM5:00北小西門集合 の予定です。



☞ 本号の内容 ☜

山行案内	新湯富士とヨシ沼・大沼ハイキング ～亜高山帯の新緑の樹木と湿原植物の観察～	2
表紙の本	岡田喜秋『思索の旅路』	4
活動報告・1	春の高尾山ハイキング	10
活動報告・2	深岩観音参詣と深岩山一周ハイキング	16
読者からいただいたおたより		20
こんな虫いました	ナナフシ	21
愛書家のひとりごと	文庫本蒐集の愉しみ	22

岡田喜秋『思索の旅路』（1966年5月20日・大和書房発行）

旅する態度——伊豆 大峠

旅がその人のところに投影して、いつまでも持続してあとあとまで忘れ得ぬ思い出としてよみがえるとき、人はその旅を「よかった」と感じる。その持続度に比例して、旅の値打ちが決まる。ある場合は、道に迷ったときの何時間だけがつよく記憶に残り、ある場合は、雨にうたれて歩きつづけた何時間かが、その前後の行動から浮彫りにされるように思い出されたりする。

そんなとき、私はいつも旅という言葉の語源について考える。トラベル(travel)とは、travail からの転化で「苦労」とか「労働」という意味のフランス語であった。もともと遊びとか、楽しいといった要素はまったくなかったのだ。それは乗物が発達していなかった時代のことを考えてみればわかる。足をつかって「歩いた」から、苦労したのだとばかりは言えない。もともと日本だけでなく、ローマでも、道路が最初につくられた頃、そこを旅したのは、一国の皇帝以下、貴族や公用を帯びた高級官吏だけだったのだ。庶民が旅をしようとするれば、ひどくつらいものであった。目的なしに旅をたのしむということとは、稀なケースであった。

日本ならば、紀行文の一変形とみてよい「土佐日記」(953年)や、1200年代の「東関紀行」「十六夜日記」が昔の旅の実情を今でも伝えてくれるが、この3人の作者たちの旅も、実はみな、目的が公用であった。「土佐日記」が紀貫之の作だとすれば、それは土佐の守という身分の高級官吏が、京都へ栄転する際の赴任旅行であり、「東関紀行」の作者も、旅行の動機としては当時幕府のあった鎌倉へ何か陳情の目的で京都から出掛けたとみてよい。「十六夜日記」は女性の作だが、これとても、彼女の遺産相続の訴えのために、当時裁判所のあった鎌倉幕府へ出掛けて行ったのが動機である。

純粹に旅することを目的とし放浪のたのしさを味わい、公用の副産物としてでない旅行観を記録したのは、西欧でも17世紀のルソーが最初ではなかったか。コロンブスのアメリカ発見(1492年)や、マゼランの世界一周(1519～22年)は、私にいわせれば未知の国の探検が目的で、日本では1800年の伊能忠敬の北海道旅行でさ

(次ページへ続く)

え、測量という行為が目的であった、それだけに、古川古松軒と菅江真澄という江戸中期の二人の旅人は、芭蕉以後において特筆すべき存在だと私はいいたい。しかし、古川古松軒の場合は、やはり当時の地方生活を巡視するという公務があったのである。

それだけに、菅江真澄(1754～1828)の旅の態度がひかりを放っている。彼の半生36年にわたる旅の記録はすばらしい。『真澄遊覧記』という70冊に及ぶ紀行文は他人の追隨をゆるさない。

この菅江真澄と同じ時代、ジャン・ジャック・ルソーは、スイスからイタリアへ3年間の放浪の旅をし、「一国民だけしか見ないものは、人類を知ったとは言えない」という開眼をして帰ってきた。鎖国時代の日本に生れた菅江真澄は、日本全国をこまめに歩いて、克明に各地の風物や生活のローカル色を絵入りでノートした。

日本では、芭蕉に次いで、独自の旅心を創造した人物として、この菅江真澄を、私は貴重な存在だといいたい。彼はいわゆる庶民のひとりである。旅がしくて、旅に出たのだ。三河の国に生れたというのが、くわしい出生地はわかっていない。いつも独特な頭巾をかぶって、旅先でも絶対にそれをとらなかったという。誰が聞いても、彼は生地を明かさなかった。一種の謎めいた魅力すらあるこの人物は、実は博覧強記の学者であり、薬草の研究者でもあり、水墨画でも一家をなしていたといえる。幼少のころから憧れていた地方見聞の旅を、30歳のときから堰を切ったように行動にうつしはじめ、「伊那の中路」を処女作に、「わがこころ」「秋田のかりね」「外ヶ浜風」「えぞのてぶり」と毎年のように「遊覧記」を書いた。

これが本当の旅だ。彼が47歳当時、東北地方を歩き、「錦の浜」を書いている頃、幕府は伊能忠敬に北海道測量を命じているが、二人の旅は対照的だ。

純粹に旅をたのしむこと——その魅力を考えるとき、私は今日の「ツアー」とよばれる形の旅の味けなさを思う。トラベルに「苦勞」という語源があったのに対し、ツアー(tour)とは、いわゆる「周遊旅行」だ。有名地を表面的に見物して出発地へもどってくる旅行を、ツアーとよぶのである。ツアーという言葉の語源を調べてみると、ラテン語で「ロクロを廻す」ということである。思うに、ぐるぐる廻ってくる形の旅行、世界漫遊旅行というのが、その一例であろうか。そこには「トラベル」という言葉がもつ「自



主性」と「困難との遭遇」がない。それゆえに、ツアーは、トラベルほど旅する人間の「精神」にふれ合わないのである。

そんな経験を持つとするなら、どこでもよい。たとえば、ある早春の日曜日の伊豆半島、私はいわゆる週末旅行者と相前後しながら、下田へおむかう電車に乗ったが、それらの旅行者とは目的地を一致させず、南伊豆でも大峠という峠を越えてみようと思ったことがある。

その峠には、今なお、バスは走っていない。駿河湾の青さがひとしお増す波勝岬にちかい草山のつらなりの一角にあり、一昔前の伊豆を思わせる草肌の山々が、歩くことの嫌いな旅行者を近づけずに、そびえている。その麓の街道を通る下賀茂からのバスは、車内にほとんど観光客の姿をみせず、私ひとりだけを山間のバス停留所で降ろした。そこからゆるやかな山の斜面を登ってゆくと、長者原という絵のような開拓部落に出た。

そこで私が出逢ったのは子供を連れて一人の開拓農夫であった。彼は私のカメラをみて、記念撮影をせがんだ。伊豆でありながら、ここでは旅行者に飢えていたのだ。私はその可愛い子供と農夫を、ファインダーからのぞいて、シャッターを切った。あのとき、背景になった空の色と、眼下にみえた童話のくのような開拓民の家々。それは南イタリアを思わせる明るさと、濁りのない色彩にあふれていた。

大峠でみた残雪の富士よりも、その峠から眼下の山村へおりようとして道に迷ったときの、わずか 30 分ほどの行為が、今も私の記憶には鮮明だ。こうした旅のある部分が、時間の経過とともに薄れないことを知るとき、トラベルという言葉の語源に思い当たってもいいのである。

今日、人々はツアーすることに、あまりにも馴れてしまった。旅をしても、現代には困難がない、と断定する人さえいる。交通の発達が旅情を稀薄にさせたという言い方に納得する人が多いようだ。しかし、この言い方は正しくない。菅江真澄の時代には、旅に困難が横たわっていた故に、本来の意味の旅が実現出来た。今はそれが出来ないという言い方も正しくない。

それを求める人にとっては、現代でも、困難や苦労はかぎりなく待ちかまえている。多くの人は、それをあえて求めようとしないだけだ。

(次ページへ続く)

最近、アメリカの社会学者、ブーアスチンが書いた『幻影の時代』という本が、旅行する人々に対して、夢の喪失を確認させた感がある。彼は、全世界の人々が、つくられた観光地で、つくられたローカルカラーと演出された旅情に身を投じてだまされている、という。旅行者は、気の毒なことに、ショーとホンモノの区別がつかない、となげく。しかし、だまされたい人も多いのだ。

「トラベル」と「ツアー」の区別を知らない人にとっては、それは致し方のないことなのだ。旅は自主的にそれを計画し、行動に移すとき、予期しない行為を強要され、それが決定的な思い出となってここに刻まれるのである。

岡田喜秋・人物紹介と著書目録

1926（大正15）年1月2日、東京生まれ。紀行文作家。

中学生時代、日本アルプスを1週間かけて縦走した体験から山の魅力を知る。この時松本の町に「惚れ込」んで旧制松本高校を志すことになり、その在学中には木曽路、中山道なども歩く。旅ごころに誘われて進んだ東北大学経済学部在学中に戦後を迎え、初めて書いた紀行文「こけしを育てる山々」を、日本交通公社発行の雑誌「旅」の懸賞に応募。これが受賞作と知らされたのは、1947（昭和22）年、大学を卒業して同社に入社後のこと（選者は河上徹太郎と深田久弥という）。以後同社に勤めながら、紀行文作家となって今日に至る。1949（昭和24）年より雑誌「旅」編集部配属、1959（昭和34）年より12年間は編集長を務める。この編集者時代から日本各地を取材し、27歳の時の『こころの山・こころの旅』以後、人生と旅をテーマに数多くの作品を発表。紀行文集、エッセイ、評論など刊行。日本交通公社退職後は、横浜商科大学教授として、観光学の構築に努める。



「こころの山・こころの旅」（千代田書院 1953）

「作家と風土」（築地書館 1956）

「秘められた旅路：ローカル線をめぐる」（万記書房 1956）

「週末旅行：秋の旅路を探る」（東京創元社 1957）

「よろこびの山かなしみの山」（知性社 1958）

「山の奥岬の果て」（東京創元社 1958）

「山の讃歌」(朋文堂 1959)
「日本の秘境」(東京創元社 1960、角川文庫 1964、
スキ-ジャーナル(自然と人間シリーズ 5) 1976)
「若い日の旅路」(青春新書)(青春出版社 1961)
「日本の旅路: その詩と真実」(日経新書)(日本経済新聞社 1964)
「思索の旅路」(大和書房 1966、中公文庫 1975)
「国立公園」(緑川洋一/写真 東京中日新聞出版局 1967)
「日本の旅情」(東京新聞出版局 1968)
「青春の山想」(山岳名著シリーズ 2)(二見書房 1969)
「秘話ある山河」(日本交通公社・平凡社 1970、平凡社ライブラリー 1998)
「ニューヨークの靴音」(白馬出版 1972)
「旅と人生の出会い」(大和書房 1972)
「自然と旅の原点」(PHP研究所 1972)
「山村を歩く」(河出書房新社 1974、河出文庫 1981)
「旅について」(講談社 1975)(講談社現代新書 389)
「空と大地の黙示 作家と風土」(西沢書店・名著刊行会 1976)
「旅の発見」(玉川選書)(玉川大学出版部 1977)
「すべてふるさと 東日本篇・西日本篇」(中央公論社 1977、中公文庫 1980)
「私の文章作法」(ぎょうせい 1978)
「旅に出る日」(中公文庫)(中央公論社 1979)
「心にふれあう自然」「旅の木の実」(文化出版局 1981)
「旅するところ」(講談社文庫)(講談社 1981)
「旅情を感じるとき」(岡田喜秋旅の発見 1)(河出書房新社 1982)
「旅情百景」(河出書房新社 1983)
「山里にひかれて」(岡田喜秋旅の発見 2)(河出書房新社 1983)
「旅に出る日」(中公文庫)(中央公論社 1983)
「心にのこる風景」(岡田喜秋旅の発見 3)(河出書房新社 1984)
「旅する作家たち」(牧羊社 1984)
「四季を歩く」(河出文庫)(河出書房新社 1986)

- 「旅のあとさき」(牧羊社 1988、中公文庫 1994)
 「町並み」「野仏石仏」(1986)「橋づくし」「性神秘仏」(1987)(監修)
 (歴史・美術ガイド)(みずうみ書房)
 「旅情百景」(河出文庫)(河出書房新社 1990)
 「空中散歩日本の旅 1-14」(監修)(新日本法規出版 1990-1)
 「旅人・曾良と芭蕉」(河出書房新社 1991)
 「歴史のなかの旅人たち」(玉川大学出版部 1992)
 「よみがえる旅心」(日本文芸社 1992)
 「波濤のかなたに」(史談の広場 8)(遠藤周作・尾崎秀樹/監修 富士見書房 1994)
 「ゆきゆきて 河合曾良句碑建立記念誌」(共著)(大智院芭蕉曾良の会 1994)
 「木を見て森を知る」(講談社 1994)
 「旅に学ぶ」(玉川大学出版部 1996)
 「旅する愉しみ」(「こころ」シリーズ)(ほるぷ出版 1998)
 「自然に学ぶ」(玉川大学出版部 2001)
 「雪舟の旅路」(2002)「西行の旅路」(2005)「芭蕉の旅路」(2008)
 「人生の旅人・啄木」(2012)(秀作社出版)
 「旅に生きて八十八年」(河出書房新社 2014)
 「定本日本の秘境」(ヤマケイ文庫)(山と溪谷社 2014)
- ※ 国立国会図書館蔵書目録から単行本を中心に主に刊行順にまとめました。
 この他に雑誌掲載記事や共著の本が多数あります。

第24回
交通図書賞
受賞



自然観察クラブ 会費納入のお願い

- ☆ 年会費 (個人または家族) 1,800 円
 // (会報不要または直接取りに来られる方) 600 円

※ 会報はインターネットでご覧になれます。

☆ 会費の主な用途

会報発行・発送用諸経費 (郵送料、封筒・印刷用紙、インク代等)、
 プリンター保守費用、臨時催事の通信、その他

春の高尾山ハイキング

4月6日（日） 天気・くもり一時雨時に小雪

昨年に続き桜の季節に東京の人気の奥山、高尾山（今やミシュランガイドの三ツ星観光地）への遠征を計画しました。裏側の沢沿いの道の風情を楽しむべく今回も小仏方面からの登山計画でしたが、JR 高尾駅に着いたところで早くも怪しげな雲行きのため計画変更、京王線で高尾山口までもうひと駅乗り、正面 1 号路から天候の許す限り行ける所までということになりました。ここは大阪・箕面まで通じる東海自然歩道の起点でもあります。満開の桜で華やく広場から登り始めましたが、昨年以上に天候に恵まれず、途中から雨具なしにはいられないほどの雨に。所々の展望も雲や霧に包まれてぼんやりですが、こんな天気でもてんでの雨具に身を包んだ老若の登山者で山道は大賑わいです。

リフトの山上駅広場まで行ったところで俄かに日が差してきたので、ここで大勢の登山客に交じってとりあえず昼食休憩に。そのまま引き返す予定が、子どもたちの「ここまで来たのだから山頂まで」との主張に、さらに歩いて山頂を目指します。雨どころかあらまじりの雪模様の中、薬王院境内の数々の朱塗りの建物の間を抜け、土産物の並んだ茶屋の前を通り、やっと山頂へ。帰りは天気も落ち着いてきて、雨上がりの道を先ほどのリフト山上駅まで戻り、下りのリフトで眼下の展望や斜面の花々を眺めながら楽々の旅です。ケーブルカーが運休中のためリフトを利用したのですが、ガラス越しでない景色に触れながらの 10 分ほどの行程は、思いのほか快適なものでした。

麓の門前町でしばし買い物を楽しみ、京王線から JR に乗り継いで帰宅の途につきました。宇都宮での日光線の長い待ち時間に、寝台特急「北斗星」を見送りました。

（12 ページから掲載の佐々木君のレポートもご覧ください。）

※ 参加者

小川知峻、佐々木伸二、鈴木若菜、
平井亜湖、小島美穂、石崎隆史・裕子、
石束ゆみ、阿部瑞穂・良司・みゆき

（計 11 名）

雨上がりの高尾山頂にて



《旅の記録》

行程：日光—鹿沼—宇都宮—小山—高尾—(京王線)—高尾山口…(40分)…
金毘羅台…リフト山頂駅(昼食)…薬王院…高尾山頂…リフト山上駅＝
(12分)＝リフト山麓駅…京王高尾山口—(京王線)—高尾—(中央線)—
神田—上野—(宇都宮線)—宇都宮—(日光線)—鹿沼—日光
交通費：JR 青春 18 きっぷ 2,300 円 (子ども同額)、
京王線 (往復) 440 円、子ども半額、
2人乗り観光リフト (復路) おとな 480 円、子ども半額

※ 注目の植物(50音順)

(木の花) アセビ、カンヒザクラ、キブシ、ミツバツツジ (?), ミツマタ、
ミヤマシキミ、モミジイチゴ、ヤブツバキ、
(草の花) シャガ、シュンラン、タチツボスミレ、ナガバノスミレサイシン、
ニリンソウ、ムラサキケマン、ヨゴレネコノメソウ、ユリワサビ、
(樹木) コナラ、シラカシ、ボダイジュ、
(つる) キジョラン (右写真→)、(その他) ゼンマイ



※ 聞こえた鳥

イカル、ウグイス、ガビチョウ (外来種)、キジバト、コゲラ、
シジュウカラ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、メジロ、ヤマガラ

※ 高尾山遠征写真集



(上) 薬王院にカンヒザクラと小雪
(下) 山を下りれば川沿いの
門前町に満開の桜



(左上) 賑わう正面登山口
—見穏やかな登山日和
(左下) 1号路入口
道を確認する
(上) 山上の名所「蝸杉」



※ 参加者からいただいたおたより

4月6日の早朝、目覚ましの音でふとんからもそもそ出てきたのは夜明け前の5時過ぎでした。これから始まる「プチ旅行」を楽しみに家を出たのが5時半ごろ。車で12分ほどの日光駅には40分過ぎに到着しました。まずは5000円をくずすのから始まり、ICカード「スイカ」に入金します。駅員さんとちょっとワイワイやってから改札内へ。



205系日光線色の最も前の車両で席を取り、まず朝ごはんから始めます。日光駅を6:00に発車したのは524M宇都宮行き。今市、下野大沢、文挾を定刻に通過して、6:27着の鹿沼で参加者7人に加え、府中まで行く小川さんの2人が合流、車内はにぎやかになりました。子どもだけでロングシート1つを占領して、定刻(6:41)宇都宮に到着。5番ホームへ向かうと湘南新宿ライン逗子行きがほどなく入線し、53分に宇都宮を出発。東北新幹線や宇都宮貨物ターミナルを見ながら7:20小山に。向かい側ホームから出発するのが臨時の「ホリデー快速富士山3号」河口湖行き、189系特急形での運行です。普通乗車券のみで乗車できるのに、リクライニング機能付の座席はグリーン車並みでおトク感◎。7:24発で古河、久喜、蓮田など主な駅に止まり、大宮から武蔵野線に入ると今度は各駅停車。連絡線を通り立川には定刻で到着。昨年5月には12分遅れて乗り継ぎが間に合わなかったという苦い経験もありますが、今回は順調に進み9:19に定刻高尾に到着しました。トイレなどで20分ほど過ごしてから改札口を出て、日本の駅100選の高尾駅北口へ。

この駅舎は大正天皇の葬儀の際新宿御苑につくられた臨時駅に使われた木材が転用されたのが始まりとか。そんな駅舎を見ながらバスターミナルへ。そこには何とバスの転車台が！奥の方が狭いためつくられたようです。小仏行きのバスを待っていると、くさった雲(ここでは雨雲をさす)がやってきたので予定変更をして京王線で高尾山口へ。

リフト駅を横に見ながら1号路を山頂めざして登り始めます。背中時刻表が重いつたらあつた……。途中ちょっと寄り道して金毘羅台へ。かなりの展望でしたが右側の方の少しかすんでいるところを見ると雨のようです。「近いうち雨が降るぞ」と思った矢先の2分後、早くも雨粒が落ち始めました。さらに2分で本降りに。それどころかあられまで降り始め、サイアクの天気です。ところがリフトの山頂駅に着く時はうそのように晴れてきました。都合がいいのでここでお昼に。大学生くらいの集団がブルーシートを囲んでこの先どうするか話し合っていました。聞いていると相模

大野から来たようです。知峻君とやけに仲良くなってしまい、おにぎり2個とお菓子2袋をもらっていました。



お昼がすんで歩き始めるとまとも天気がおかしくなり始め、お茶屋さんの前で雪が降ってきました。さらに上へ行くと今度は大粒のあられがバタバタ降り始めました。山頂は雨のため全く展望がききませんでした。天気が良ければ富士山も見えるそうですが、もちろんきょうは見えるわけがありません。

山を下ってさっきのお茶屋へもどったのは2時半ごろ。「隊長」一家はずっと後ろなので、残りの7人で先にリフトの駅で待っていることに。ここで20～30分待ってようやくリフトに乗り込みました。およそ12分の空中散歩はとても楽しかったです。

下の駅で運休中のケーブルカーを見ながらおみやげ屋さんへ。毎回恒例のおまんじゅう屋さんを経由して予定より30分ほど早い16:30発の京王線準急新宿行きで高尾へ(予定では17:01発の普通新宿行き)。高尾からは中央特快で神田へ。神田の手前では左車窓に旧「万世橋駅」のホームが。ここは戦前まで中央線の終着駅だったそうで、東京駅が開業すると神田駅との距離があまりに近いため3年ほどで廃止になったそうです。ホームは今草ぼうぼうで、このことを知っている人でないとそこにホームがあるなんて気づきません。そこを過ぎると東北新幹線が見えてきて、そこを走っていたのは…クリーム色の車体に青と銅色の帯を巻いたE7系長野新幹線でした。「和」をコンセプトにしたそうです。神田では10分のトイレ休憩をして京浜東北線で一路上野へ。

コンコースで出発列車の表示を見て、18:32発普通宇都宮行きに乗車することにしました。駅弁、おみやげの買い物もすませ14番ホームへ向かうと、15番線にはG51系あかぎの回送列車が。特急ホーム8番線にはフレッシュひたち51号高萩行きが。20分過ぎにホームで特急出発を見て列車へもどろうとしたときこんな放送が耳に入りました。「14番線に停車中の列車は18:32発、各駅停車宇都宮行きです。(一部省略)…後ろ10両は途中の小金井止まりとなりますのでお乗り間違いのないようお気をつけください」これで自分たちの車両は宇都宮まで行かないことが分かりました。急いで1号車から11号車へ移動する最中13番からは快速ラビットの発車を知らせる「ああ上野駅」の駅メロが流れてきました。この13番線は上野を出発する「北斗星」「カシオペア」「あけぼの」の3つの寝台特急をすべて見る事ができるのです。このうち「北斗星」はこのあと19:03に上野を出て、ぼくたちは宇都宮で見ることとなります。18:32列車は宇都宮に向けて出発しました。駅弁などを食べ

ているとあっという間に後ろ 10 両が切り離される小金井に到着。分割はきわめて静かに行われました。

宇都宮には 20:22 着。ホームへ着くと 27 分着 29 分発の「北斗星」を見るために 7 番線に向かい陣を張りました。表示板には函館、森、八雲、長万部…という信じられないような停車駅名が流れます(すべて北海道内)。



そして 26 分電子音の後に「間もなく 7 番線に寝台特急北斗星札幌行きが参ります。危ないですから黄色い線までお下がりがください。この列車は 11 両です。」というパターンが 2 回繰り返され、暗やみの向こうに「ピカッ！」と光が見えたと思うとそれはまたたく間に近づいてきてモーター音をとどろかせながら入線してきました。ぼくは 1 人で先頭へ向かい出発を見ました。ぼくは一度北斗星に乗車したことがありますが、24 系 25 形のなんともいえないレトロ感がいい感じでした。5 番ホームへ向かって 21 時ちょうどに宇都宮を出て鹿沼 21:14 着。ここでみんなとはお別れ。その後も 25 分ほど乗って 21:41 に日光に帰りつきました。朝出かけてからおよそ 15 時間、内容の濃い旅をすることができました。(日光小 6 年・佐々木伸二・下の絵も)



ホリデー快速富士山 3 号
小山始発、河口湖行き
189 系 M52 編成での運転でした。
小山から高尾までおよそ 2 時間。



京王線準特急新宿行き
京王電鉄



E231 系湘南新宿ライン
10 両の本編成と
5 両の別編成がある。

☺ 長文の綿密なレポートと絵をありがとう。他の方からの投稿もお待ちしておりますよ。(編集部)



金毘羅台からの関東平野の眺め

※ 高尾山遠征写真集（のりもの編）



ホリデー快速富士山3号



J R 高尾駅北口のバス転車台
結局バスには乗らず



京王線にもひと駅乗車



高尾山観光リフトからの眺め

乗り物ではないが
参道から木々の間に見下ろす
圏央道八王子ジャンクション付近
トンネル入口



※ 高尾山遠征写真集（植物編）



（上段）ナガバノスミレサイシン、ヨゴレネコノメ、シャガ



←キブシ

シュンラン→

（下段）ヤブツバキ、ヒカンザクラ



北光クラブ・鹿沼学舎共催
深岩観音参詣と深岩山一周ハイキング
4月13日（日） 天気・はれ

案内 里でサクラの花が咲く頃は地面も一年で最も美しい草花で彩られます。見笹霊園から広陵カントリークラブの入口へ。水辺ではニリンソウの花が見られます。また道ばたではいろいろな種類のスミレが咲いていることでしょう。まずは岩山の麓へ向かい、アズマイチゲの群生地を訪ねてみましょう。3月23日の時点ではちょうど咲き始めていますが、いつまで花が見られるでしょうか。岩山麓の柵田を見ながら南下。大きなイヌシデのある深岩観音入口へ。鹿沼でもっとも太いと思われるこのイヌシデも、ちょうど黄色いイモムシのような風媒花をぶら下げているかもしれません。参道や墓地にはいろいろな石仏が見られ、足元にはムラサキケマンの花が。1か所、水が湧いていてシャガが群生しています。石段を登り始めるとスギが立ち並んでいますが、シラカシ、アラカシ、アオキ、イヌツゲ等の常緑樹も多く、ヒサカキ、ヤブツバキ、シキミ等はちょうど花の季節です。

観音入口に戻って、深岩山一周コースを歩いてみましょう。山の東側は車道ですが、西側は山道をたどります。整備されている歩道ではないので、庭先を通ったり、多少歩きにくい箇所もありますが、一周1時間もかかりません。まだ樹木は葉を広げていないので野鳥の観察にも好都合です。

そそり立つ岩壁群と柵田のある風景は鹿沼では貴重なものです。

報告 満開の桜がそろそろ散り始めた春うららの日曜日の朝、見笹霊園の駐車場に小学生を中心とした北光クラブと、年配者の多い鹿沼学舎の2団体のメンバーが集まり、深岩をめぐる草木が萌え始めた里山歩きの1日を楽しみました。

見笹霊園を出発してなだらかな道をたどり、左右に展開するゴルフ場の中を抜けるように深岩の里へ下ります。桜が満開の田園風景の中、道ばたには、早春の野の花がいろいろ咲いていました。

深岩山の麓に着き、待機していた福田純一氏の解説を伺った後（解説をご参照下さい）、いよいよ長い石段を登り始めます。石段からはイワタバコ（右写真）の若葉が芽を出していました（梅





雨時に咲く花が楽しみです)。大岩を穿って設けられた本堂は、つい先日、33年ぶりの御開帳があったばかり。切り立った深岩山の岩壁は、その下に立てば頭上にのしかかるように張り出し、その上に立てば足下の景色に吸い込まれるような迫力です。

この後少し足を延ばして、岩山の麓のアズマイチゲの群生を見に。あいにくちょっと時期が遅かったようです。

その後観音入口に戻って、深岩山の麓を一周。初めは住宅の間の車道を歩き、途中から山道に。最後はスタッフがあらかじめ用意した板を渡って、道路に戻りました。

見笹霊園で解散の後、自然観察クラブのメンバーは昨年の下遠部の川原に足を延ばして草上で昼食、水の生き物観察などを楽しみました。

※ 参加者

亀山義宗・千尋、鈴木若菜・悠歩・友紀、平井亜湖、阿部良司・みゆき
(計8名、他に鹿沼学舎から19名)

※ 見た植物(50音順)

(草の花) アカネスミレ、アズマイチゲ、イヌナズナ、オオイヌノフグリ、カキドオシ、カラスノエンドウ、カントウタンポポ (写真)、キランソウ、タチツボスミレ、タネツケバナ、ナズナ、ニリンソウ、ノボロギク、ヒカゲスミレ、ヒメオドリコソウ、ホトケノザ、
(木の花) アケビ、アセビ、シキミ、ヤブツバキ



※ 見た鳥

アオサギ、トビ、メジロ、ヤマガラ



桜が満開の見笹霊園に集合



笹原田～深岩の里山風景



深岩山

解説

深岩観音について

深岩観音は下野三十三観音霊場のひとつで、深岩山の中腹の岩窟内にお堂があります。弘法大師が建立したと伝えられていますが、はっきりしたことはわかっていません。本尊は三十三年に一回開帳されますが、去る3月29日に開帳されたばかりです。お堂の格子からは千手観音の木像が安置されているのがわかりますが、洞穴奥にある本尊は聖観音坐像です。

深岩観音の入り口には、かつて満照寺(深岩山亀甲院)という真言宗のお寺があり、深岩観音も管理していましたが明治の初めに廃寺になり、その跡は墓地になっています。江戸時代には幕府から3石の朱印(領地)を受けていました。明和2年(1765)には、五代将軍綱吉の養女浄岸院(竹姫)から、葵の紋付の戸帳と水引(どちらも神仏の厨子に掛けられる帳(とばり)と幕)が寄付されており、幕府との強い結びつきと高い格式があったことがわかります。

観音堂の左前には鹿沼市指定文化財の石幢(せきどう)があります。故人の供養のために建てられたもので、六地蔵が刻まれています。天文6年(1537)に造られたものですが、同様の石幢は板荷の薬定寺にもあり、そちらは永正9年(1512)に造られたものです。同じく観音堂の左側の壁面には聖観音の磨崖仏が刻まれています。

なお、深岩観音が安置されている洞穴は、中世から近世の陶器などが出土しており、「堂口遺跡」として鹿沼市の遺跡として指定されています。

(鹿沼学舎・福田純一)



←長い石段を登り詰めると
大きな岩窟に本堂が…↑



洞穴の赤い格子の奥に
千手観音木像
(本尊は奥に)

※ 参加者からいただいたおたより

春爛漫に浸る

豊田敏盟

のどかな深岩周辺の自然散策と深岩観音の歴史探訪、好天に恵まれて楽しい一時を過ごせました。

土手や畦に目を配り、山際の落葉道を歩みながら、タチツボスミレ、オオイヌノフグリ、ホトケノザ、ムラサキケマン、アズマイチゲ、クサボケなどの花を見つけ、その美しさに感嘆しました。小川の深みに魚影を追い、幼少期の魚とり遊びを思い出しました。さらに、岩場に祀られた観音堂の歴史を伺い、古人の信仰の篤さに畏敬の念を抱きました。

集合地に戻り、風に散る染井吉野と遠くに淡い黄緑に染まる山々を眺め、心の中で一句詠んでみました。その拙句を添え、リーダーの阿部さん、五月女さん、深岩観音の歴史を語ってくださった福田さんを始め、参加された皆様に感謝しつつ、文を閉じさせていただきます。

花ひらり 地に舞いおりて 山笑う



桜が満開の里山歩き



ゴルフ場の傍らを
のんびり進む



深岩観音入口



こいのぼり翻る深岩の里
背景は二股山



市街地からすぐのところに
こんな田園風景が広がる



最後に仮設の板橋を渡って
道路に戻る



ミズキの枝もお目覚め



アカネスミレ



モミジイチゴ



深岩観音入口の
イヌシデ



岩山山麓の棚田



満開から
そろそろ散り始めの桜

※ 4月20日(日)の「鹿沼東大芦・長安寺より羽賀場山、お天気山」山行報告は、次号に掲載します。お楽しみに。



☺ 読者からいただいたおたより ☺

『月報第23号』ありがとうございました。2冊もの書影、そして文との組み合わせ、田部愛の表わし方の諸相を味わっております。

出会いの奇跡は神がかり、今年度は毎号田部作品を御紹介頂けるとか。そのあつい御言葉になぜか“エール”のメロディーが重なりました。がかり縁でしょうか。次号以降の「いざない」もわくわくと楽しみにしています。

(GWは御岳、日ノ出ですか。この2山もよく行きました。何年か前は趣を変えて大岳山縦走路から逆方向の独立峰の高岩山に行きました。あまり知られていないようですが、山道といい、渋い(?)山ですよ) (白坂正治)

※ 5月3日(土)の「東京、御岳山・日ノ出山ハイキング」報告も次号で。

🌀 こんな虫いました 🌀



毎年、当店の裏庭に姿を見せるナナフシ、今年も赤ちゃんを発見しました。

とまっているムラサキケマンの大きさと比べてみてください。全長2cmくらいかな？

カマキリと同じ不完全変態で、生まれた時からこの格好、この後どれくらい大きくなっていくのか…

でもカマキリと違って草食だそうです。

(2014年4月22日撮影)

ナナフシは小枝によく似ている。木の上を生息環境としているので、地球上で最も効果的な自然の擬態が行える動物だろう。ナナフシ目はナナフシと、ナナフシと同様に周囲に身を隠すのがうまいコノハムシで構成されており、その数はおよそ3000種だ。

歩く棒という意味の「ウォーキング・スティック」とも呼ばれるナナフシの大きさは、体長が約1.2センチの北アメリカ産の小さな種から、体長が30センチを超えるボルネオ産の大きな種までさまざまだ。巨大なものは、脚を伸ばした状態で50センチ以上もあり、世界最長の昆虫として知られている。メスは通常はオスよりも大きい。

目にも鮮やかな色合いの種やよく目立つストライプ柄の種もいるが、ナナフシは一般に周囲の色（普通は緑や茶）に擬態する。多くのナナフシには羽があり、華やかで美しいものもいるが、ほかのものは木の幹に似ている。体にとげや結節がある種が多い。

ナナフシは熱帯や亜熱帯地方で見かけられることが圧倒的に多い。温帯地方に生息する種もいるが、森林や草地で葉を常食としており、夜行性で、日中はほとんど動かずに植物の下に隠れている。

ナナフシの多くは捕食動物を阻むために死んだふりをし、敵から逃れるために脚を自分で切断するものもいる。また、とげで覆われた脚で捕食動物を強打するものもいる。北アメリカには腐敗臭のする液を放つ種もいる。

ナナフシについては情報がほとんどないので、野生種の絶滅危険性について明言することは難しい。蝶などの標本作りが人気を博しているのと同様に、ペット取引が潜在的な脅威となる可能性がある。

(ナショナルジオグラフィック日本語版公式サイトより)



愛書家のひとりごと

文庫本蒐集の愉しみ

夜間大学に入学した僕は、昼間、同じ大学の図書館に、アルバイトとして勤めていた。図書館といっても僕のいた部署は視聴覚係で、レコードやテープ、マイクロフィルムを整理したり貸出したりする所。中でも、僕は音楽関係の資料を整理したり、また週1〜2度開催するレコードコンサートのポスターを描いたりしていた。職員が5人いる事務室にはいつもNHK-FM やFM 東京が流れていた。勤めて何年目のことだったか、NHK-FM の朗読の時間、新しい本の朗読が始まった。

「その上信国境の山上の牧場というのを、はじめて私の訪れたのは、まったく偶然のことからだった。たしか大正7年の、まだ3月にはいつてからわずかしかたない早春の日に、ひとりで荒船にのぼるために、私は荒船の上州側にある三ツ瀬という山村の小さな旅宿を朝早くに出発した。

冷たい西風がつよく吹いている、よく晴れて、雲ひとつない、表日本の冬から春のはじめにかけての特有な天候の日だった。

元来その時私は、越後の関温泉へスキーをやりに行く途中を、廻りみちしてわざわざ下仁田からその荒船の麓の村へやって来たのだった。荒船という山をわざわざめざして来たのだった。私はそのずっと前に、荒船という山を妙義から見て、ほんとに陸上の朽ちた船のような面白い形の山だと思っていた。そしてそいつに登って、あの平らな、ひろい頂上を歩いてみたかったのであった。そしてその時はじめて、まだ雪のふかい荒船の頂上高原に、ようやく急な雪の硬い斜面に鉋で足場を切つてのぼりついた。私は忘れない、その時そこから見た山上展望の印象を。それは実によかった。雪にあおおとかがやいている遠い山脈の波が、西風に洗われてするどい透明色に光っていた。私は登山者の貪慾を眼にかがやかして、おさぼるようにこの山頂のぐるりにひらける山上展望に眼をみはったのだった。それ以来ますます私は荒船が好きになって、たびたびその後、この山上の牧場にくるたびに、私はそこへ行く。」

(大島亮吉著『山 研究と随想』より「荒船と神津牧場付近」)

僕が山の本を読んで感動した、というのはこの本が初めてである。大島亮吉に

については、気取っている、とか尾崎喜八の盗作だ、など
という人もいるけれど、それは一部であって、取るに
足らぬことである。そもそも、大島が投稿したのは自分



の所属する大学山岳部の部報であって、それが本となるのは大島の死後なので
あり、彼の本はすべて遺稿なのだから。

僕はこの朗読を聞いて、すぐに、大学の教職員しか出入りのできない地下の書
庫に行って山岳書がまとまっている書架を見つけた。仏教系の大学だから致し方
ないが、そこには大した山書はなかったし、目的の岩波書店版の大島亮吉著『山
研究と随想』（昭和5年）の初版はあったけれど、もちろん図書館所蔵の多くの本
がそうであるように、箱はついていなかった。

その後、この本は研究の部分が省略されて『山—随想—』として中央公論社よ
り文庫として発行されていることがわかった。ここから、僕の文庫本蒐集が始まる。
中公文庫の山の本は昭和52年4月発行の『山と雪の日記』（板倉勝宣）から始
まっている。そして昭和54年10月の『泉を聴く』、昭和55年3月の『垂直に挑む』
を見るとカバーの折込部分に中公文庫の「山と旅の本」の目録が載っていて、ず
らりと山の本の書名が並んでいる最後に、1行あけて岡田喜秋の『思索の旅路』
と『旅に出る日』が記載されていた。この目録を参考に蒐集を始めた時は、旅はど
うでもいいだろう、と思いながらも、この「岡田喜秋」という知らない人の書いた2冊
とさらに『すべてふるさと（東日本篇・西日本篇）』を一応手元に置いておくことにな
った。ところが蒐集したこれらの本の目録を作るために発行順に並べてみると、筆
頭はこの『思索の旅路』（昭和50年4月）なのであった。

昭和55年2月発行の『雪山・藪山』、昭和55年4月発行の『北の山』あたりか
らは「山の本」の目録になっていて、岡田喜秋の本は消えている。しかし僕はこの
著者がどういう人なのかも知らないまま、『思索の旅路』や『すべてふるさと』（東
西）の元版を、自分の書架に収めることになった。

岡田喜秋という人が雑誌「旅」の編集長であると知ったのはつい2～3年前のこ
とである。

山登りは実際には山麓を歩き、山を登り、山稜を歩き、沢を下ることを考えると、
田部重治が言う「山旅」が正しいのである。「旅行」というと、交通機関を利用した

「観光旅行」を思い起こすけれど、「旅」はそれらすべてを含めたものである。いわゆる「山の本」には、論説、研究、登山史、随筆、画文集、技術、遭難、などあるが最も多いのは紀行であろう。したがって中公文庫「山の本」の筆頭に、「旅」を哲学した岡田喜秋の本があるのは然るべきなのである。

今年1月30日、『旅に生きて八十八年』が河出書房新社より上梓された。(以下次号)

(阿部良司)



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第24号

2014年5月発行

北光・自然観察クラブ 鹿沼

鹿沼市戸張町1818

(クリーニングハウスあべ内)

発行人 阿部 良司

携帯 090-1884-3774

FAX 0289-62-3774

携帯 ☎ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail a2b5r7j7@one.bc9.jp

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

